

美術の窓(134)

鳥居清長の大判続き絵の異版の解釈 その一

大和文華館館長 浅野秀剛

事件物のテレビドラマを見て、日常のなにげない出来事から事件解決のヒントを得るといふシーンがしばしば出てくるが、私の仕事においてもそういうことは少なくない。今回述べたこともその一つである。ただし、まだ論文になる確証はない。確証はなくても、美術の窓であれば許されるのではと思ったのである。

私は、2007年に『鳥居清長作品総目録』（千葉市美術館刊）を編集し、2009年に「鳥居清長作品総目録・補遺」（千葉市美術館研究紀要「採蓮」12号）を発表した。その関係もあって、清長の画業を評価することは人後に落ちない。そんな清長の大判続き絵に二つの異版がある。大判二枚続「杜若の池」（天明中期、高津屋伊助版、私も含め、従来「菖蒲の池」としていたもの）と大判三枚続「向鳥春の遊歩」（天明後期、高津屋伊助版）である。「杜若の池」には、2枚続の右の図に2種の版があり、「向鳥春の遊歩」には、3枚続のやはり右の図に2種の版がある。それらはなぜ2種制作されたのかというのが長年の疑問であった。何らかの事故、例えば、版木の損壊などを想定すれば説明はつくが、美術史の研究者としては、それ以外の理由も考えるべきだという思いがあった。第二の版を作るにしても、図柄を変えたとすれば、どうしてそうしたかを推定するべきであろう。

「杜若の池」は、池に咲く杜若をめぐる5人の女を描いた作品である。清長の大判続き絵としては比較的早くに制作されたもので、特に、池に咲く杜若と萩、それに左図の中央に立つ娘の腰帯を墨の輪郭線を用いずに表すことで、錦絵の絵の具の澄んだ透明感を際立たせることを意図したものと見て注目されている。

この2枚続の右図に2種の

版が見い出されるのである。一図は、笠を被った立姿の女が左手を前帯の間に入れ、右奥に萩が咲いている図（図1はシカゴ美術館蔵の2枚続）で、これを仮にA版と呼ぶ。もう一図は、立姿の女が左手で笠をつかみ、右奥に萩ではなく松が描かれている図（図2はフィラデルフィア美術館蔵の2枚続、あべのハルカス美術館での「春信一番!写楽二番!」展で10月10日から展示）で、こちらをB版と呼ぶ。確認できたものだけでも、A版を含む2枚続が4組、B版を含む2枚続が2組、他に左図のみが1、A版のみが3図伝存している。このうち、シカゴ美術館蔵の2枚続の左図の右下に「慶雲堂」の朱印が捺されている（掲載図ではほとんど見えないがご容赦願いたい）。そしてA版に版刻の版元印はないが、B版のうち日本の個人蔵の作品には、「高津板」の円印、フィラデルフィア美術館蔵品には「高津板」の円印に加えて（山形にイ）の印（いずれも墨版）が捺されている。A版とB版はどちらが先に制作されどちらが後なのか、後の版はいかなる理由で制作されたのか、というのが課題である。

どちらが先かを考えるうえで注目されるのが版元印である。「慶雲堂」と「高津板」は、一方が朱印、他方が版刻されたものという違いはあるが、ともに高津屋伊助の版元印である。千葉市美術館の田辺昌子氏によると、高津屋は天明3、4年（1783、84）頃に版元活動を開始し、寛政3年（1791）正月の伊助の逝去をもって廃業したと考えられるというのが、そ

のことは、伝存する作品からも確かめることができる。「慶雲堂」印は天明4、5年頃の作品に捺され（同じ図でも捺されていない伝品の方が多い）、天明4年11月に取材した役者絵から「高津板」の円印を版刻するようになった。つまり、原則として、「慶雲堂」から「高津板」へという流れが認められる。高津屋伊助は、はじめは画中に版元印は刻さず、一部の作品に「慶雲堂」印を捺して販売（寄贈?）したが、まもなく画中に版元印を刻すようになったのかもしれない。

したがって、シカゴ美術館所蔵の2枚続、すなわちA版の方が早いということになる。高津屋伊助は、A版を廃してB版を制作するにあたり、版元印を入れたことになる。

それでは、「高津板」の他に（山形にイ）の印も認められるフィラデルフィア美術館蔵のB版はどのように考えたらよいのであろうか。もしも、この印が墨版（主版）に刻されていたとすると、入れ木で加えなければならぬ。B版のうち、フィラデルフィア美術館蔵品の方が個人蔵品より早いとすれば、初めに2印入れていたものを、後で（山形にイ）の印だけ削除したことになる。入れ木で加えるにしても、削り取るにしても、なぜそのようなことをしたのであろうか、という疑問を解決する必要があるが、今回はそこには踏み込まない。一般の人にとって興味を引く問題ではないかもしれないということ、この欄の字数では述べるのが難しいか

らである。

図1の右図と図2の右図を比較すると、大きく変えられているのは、右上の萩が松になったことと、立っている女性の左腕が、帯間に手を差し込んであるポーズから笠をつかむポーズにされたことである。

松にしたのは、左図の松との呼応を意識したと思われる。そもそも杜若の花と萩の花では季節が合わない。屏風や絵巻物などと異なり、浮世絵版画のような小画面に季節の違う花が描かれるのは普通ではない。そういうクレームがついたので、A版を廃してB版を制作したと考えるのが自然であろう。その契機となったのが版木の破損かどうかは分からない。破損したのなら変えやすいが、そうでなくても、萩が不自然ということでも変えた可能性も十分ありうる。

それではなぜ女性の左腕の描き方を変えたのであろうか。

それについては、どうせ版全部を変えるのであれば、他の部分を変えても費用はほとんど同じであるから深く考える必要はないと思われるかもしれない。しかし、変えたのは事実であるから、少なくともA版のポーズよりB版のポーズの方が良いと判断したことになる。それはなぜであろうか。

そのことは、「向鳥春の遊歩」の右図の版を変えたことと関連があるかもしれないと思う。続きは次号の「美術の窓(135)」にしたい。

図2



図1 『鳥居清長』展図録
（千葉市美術館、2007）より複写

